

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	李 眞恵
論文題目	現代カザフスタンにおける高麗人 (コリョ・サラム) 社会の変容		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、旧ソ連圏のコリアン・ディアスポラ「高麗人 (コリョ・サラム)」のうちカザフスタンに居住するコリョ・サラムを研究対象として、ソ連末期に自由化の進んだ改革ペレストロイカを経てソ連解体へ、さらにカザフスタンの独立と体制転換という1980年代後半から現在に至るまでの大きな変化の中で生じてきた社会変容について、彼らの主要な言論の場となってきた新聞『コリョ・イルボ (高麗日報)』の記事分析ならびにフィールドワークによるコリョ・サラム関連団体関係者へのインタビュー調査によって、多角的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>序章では、先行研究レビューの後、ソ連解体後のコリョ・サラム社会に対しては包括的な学問的関心が向けられてこなかったことが指摘され、ペレストロイカ期およびソ連解体後にコリョ・サラム社会はどのように変容したのか、その結果現代カザフスタンのコリョ・サラムはどのような生存戦略を有しているのか、という問いが設定された。</p> <p>第1章は、研究対象地域カザフスタンの概況と現代的課題を提示している。ソ連を構成した一民族共和国としての成り立ちからソ連解体・独立に至る経緯、ソ連の民族政策の変遷、ソ連と独立後のカザフスタンにおける少数民族をめぐる概念の変化が議論され、独立後の国民統合において、カザフ語とカザフ文化を根幹に据えたカザフ人中心主義と、130を超える多民族の共存が重要課題となり、それらを具体化する政策に少数民族も対応する必要に迫られたことが指摘された。</p> <p>第2章は、カザフスタン・コリョ・サラムに対する視座を論じている。朝鮮半島からロシア帝国領沿海州へ、ソ連スターリン期の強制移住によりそこから中央アジアへ、ポスト・スターリン期には旧ソ連圏各地へ、という数段階の移住・定着を経て、独自の生存戦略や「コリョ・サラム」という自称の選択と定着がみられたことが指摘された。ソ連解体後、国外移住が比較的少なかったカザフスタン・コリョ・サラムにおいては、都市化の比率が高く、また民族語 (コリョ語) の使用率が低くロシア化が顕著だという特徴を持つことが示された。</p> <p>第3章では、ペレストロイカ期の全般的な自由化の進展に伴って生じたコリョ・サラム社会の劇的な変化について、コリョ・サラムの主要メディアであったコリョ語新聞『レーニン・キチ』の記事から分析している。強制移住の歴史に初めて言及が可能となり、紙上で様々な議論がきわめて活発に行われたが、その柱は民族言語の再生、民</p>			

族文化の再生、民族の歴史・記憶の再生であり、それはコリョ・サラムとしての自己認識の高揚と領域的自治の要求へと帰結したことが示された。

第4章では、ソ連解体を経て、独立後の国民統合が進められる中で新たに生じたコリョ・サラム社会の変容について、『レーニン・キチ』の後継紙『コリョ・イルボ』の記事から分析している。そこでは、国民統合のための在外カザフ人呼び寄せ政策や国家語となったカザフ語の学習奨励に対する反対の論調は見られないこと、カザフスタンの各民族の利益を代表し調整する国家機関として設置された民族会議を歓迎し、そこに積極的な位置を占めようとする意志が表明されたこと、そのような条件下でカザフスタン市民としてのアイデンティティ強化への関心が示されたことなどが明らかにされた。そこから、ソ連のコリアン・ディアスポラとして醸成されたコリョ・サラム・アイデンティティに、カザフスタンの国民統合に対応する過程でカザフスタン・コリョ・サラムとしての側面が生まれつつあることが導き出された。

第5章では、コリョ・サラム関連諸団体が集中するアルマトゥ市における関係者へのインタビューを主軸として、カザフスタン・コリョ・サラムの生存戦略に焦点が当てられている。より安定した生活を求め、他の旧ソ連諸国への移住や歴史的祖国への帰還よりは、カザフスタン残留という選択がなされてきたこと、その上で、韓国との連携活動において存在感を発揮し、政府の方針支持と民族会議への競争的参加によって少数民族としての認可と一定程度の政治力を得、カザフスタン文化の一部としてコリョ・サラム文化を位置づけ直しながら、テレビ・ラジオ・劇場などの組織やオンライン空間での紐帯が維持・展開されていることが明らかにされた。

以上の考察を通じて、1980年代後半のペレストロイカのもとで、民族再生運動の大きな盛り上がりの中で民族意識を鮮明にしたコリョ・サラムは、1991年にソ連が解体した後のカザフスタンにおいては、同国の国民統合の両輪であるカザフ中心主義と多民族共存主義に沿うようカザフスタン・コリョ・サラムとしてのアイデンティティを再び成型しながら、「受容的対応」を生存戦略としているとの結論が導かれた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、約6万件にもものぼる膨大な新聞記事の分析とフィールドワーク、ならびにロシア語・韓国語・コリョ語・カザフ語・英語といった多言語にわたる文献・資料に基づいて執筆された。ポストソ連時代のカザフスタンの国民統合と少数民族政策の特色を示しつつ、スターリンによる強制移住の結果として中央アジアに居住し、また著しいロシア化を経験してきたコリョ・サラムが、1980年代後半のペレストロイカによる劇的な民族意識の覚醒と、1991年のソ連解体による領域自治構想の挫折を経て、カザフスタンの地でそのようなソ連の遺産を引き受け脱構築しながら、カザフスタン・コリョ・サラムとして生き抜くこととするありように迫ったものである。

第1章では、カザフスタンの独立後の国民統合において、カザフ・ナショナリズムに基づいたカザフ中心主義だけでなく、多民族共存主義もまた追求されており、両者の両立こそが目指されていると論じた点を評価したい。後者を体現する装置として民族会議を重視したことは、本論文の基調を成す着眼点である。

第2章では、従来の研究において「ソ連朝鮮人」「高麗人」「ロシア韓人」など様々な名づけがあったのに対し、「コリョ・サラム」という呼称の由来とそれが自称として定着する過程に着目し、資料とフィールドにおけるアンケート調査結果などから、その正当性を議論した点にオリジナリティが認められる。一方で、今まさに進行中の課題として、コリョ・サラムの中にサブ・アイデンティティが生まれつつあるとの重要な指摘もなされており、ソ連解体後の居住国ごとのアイデンティティもその一部である。

第3章で扱われている、コリョ語新聞『レーニン・キチ』はペレストロイカ期以来多くの関係者・研究者が注目してきた資料であるが、書かれた内容の紹介・分析に留まらず、記事のキーワード分類を試み、定期欄・非定期欄の区分や記事の数的把握など、独自の試みが盛り込まれている。

第4章では、『レーニン・キチ』に比して研究で扱われることの少なかった後継紙『コリョ・イルボ』について、前章と同様の分析に加えて、年間記事数の推移や記事の言語別内訳などが示され、より包括的な分析が加えられている。1991年から2017年までのすべての記事のリスト化に基づいて議論を進めた点は、本論文において最も特筆すべき点であろう。その中で、基本的にはロシア語話者であるコリョ・サラムが国家語となったカザフ語や、カザフ伝統文化の学習にむしろ前向きな姿勢を示してきたという重要な論調も抽出された。

第5章では、前章での議論を受けて、現代コリョ・サラムの声に耳を傾けている。彼らがカザフスタンに暮らすことをなぜ選択したのか、そこでコリョ・サラムとしての存在感を何によって示そうとしているか、いかによきカザフスタン市民たろうとしている

か等を読み取ることが可能なインタビュー調査結果が示されている。

結論として、こうしたカザフスタン・コリョ・サラムの国民統合のプロセスに対する対応を、受容的でありながらも主体性を持ち、限られた条件の中で積極的に勝ち取って来た、生存戦略としての「受容的対応」と名付けた。

本論文の学術的な意義は、以下の3点である。

第一に、コリアン研究もしくはコリアン・ディアスポラ研究への貢献という観点から、旧ソ連圏に暮らすコリョ・サラム特にカザフスタン・コリョ・サラムについて、20世紀における歴史的経験と現代の社会変容とを明らかにし、意識的に選択した自称や、北とも南とも異なるアイデンティティと文化を育んできた独自性を提示した。

第二に、カザフスタン地域研究における貢献という観点から、カザフスタンの国民統合および民族政策と、それに対する少数民族の対応の具体的事例を提示した。本論文は、カザフスタンにおける多民族共存主義・多文化主義を、例えばW.キムリッカが提示してきたような、より普遍的な文脈で今後議論する可能性を開くものだと言えよう。

第三に、重要な地域研究資料・情報資源の活用・共有のための基盤形成への貢献である。『コリョ・イルボ』紙について2017年まで入手可能な限り約5万8千件におよぶ網羅的な記事リストの作成が行われており、将来的に現地との協力により索引化やデータベース化を行い、共有と共同利用を進めることが期待される。

これらの点において、本論文は優れた研究成果と評価され、地域研究に対する大きな貢献をなしている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2019年6月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。